

三河アララギ

平成二十四年

十月号

第五十九卷 第十号



ニューヨーク日記(72) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

May 31, 2012 : Hudson River Sailing

Blue Shoe Diaries



ハドソン川のセーリング行ってみたよ。暖かい季節はピアから2時間ぐらいのツアーみたいなのが出ていてワイン飲みながらボートで自由の女神のすぐそばまで連れて行ってくれるの。なかなか気持ちよくなって楽しかった。NY 外で遊べる時季がわりと短いから今のうちにエンジョイ!ディナーも外に座れる所を選びました。

We went on a sailing cruise. It's about 2 hours and you get to go really close to the Statue of Liberty. And they serve all the wine or bubbly you can drink during this 2 hours. Even if you're not a visitor, it's a great way to spend time outdoors. NY isn't really a place where you have a lot of mild weather so one must take advantage over it in late spring to early fall. This night, we picked a restaurant that has outdoor seating to keep continuing the outdoor theme.

目次

第五十九卷第十号(通卷七〇六号)

表紙 葡萄	今泉 由利 (1)	都電	秋山 逸穂 (27)
ニューヨーク日記(72)	Blue Shoe (2)	梅田浜	白井 信昭 (27)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)	オリンピック	阿部 淑子 (28)
歌集「本の木」	杉浦 弘 (5)	元祿	富岡 和子 (28)
後ろ姿	岡本八千代 (6)	「ことよせ」	いーはとぶ (29)
葡萄畑	今泉 由利 (7)	私の一首	内藤 志げ (30)
鉦たたき	弓谷 久子 (8)		林 伊佐子 (30)
自分の力で	青木 玉枝 (9)		夏目 勝弘 (31)
もぢずりの花	林 伊佐子 (10)		山口千恵子 (31)
玉虫	内藤 志げ (11)	俳句	植村 公女 (32)
滾つ瀬	佐藤 喜仙 (12)		一石 (32)
御礼肥	安藤 和代 (13)		喜仙 (33)
積乱雲	胃甲 節子 (14)		皓一 (33)
夏アラカルト	伊藤 忠男 (15)	贈呈誌 八月号・九月号	佐藤 喜仙 (35)
写経	金津 文枝 (16)	子規の短歌革新とアララギの歌人(3)	大橋 望彦 (36)
世界平和	伊与田広子 (17)	ある自然科学者の手記(5)	今泉 雅勝 (38)
御陵	半田うめ子 (18)	絹の話(23)	一石 (40)
八王子神社	清澤 範子 (19)	物理学者と詩歌の世界(33)	鮫島 満 (42)
葉月	近藤 映子 (20)	短歌に詠まれた茂吉	夏目 勝弘 (44)
青き瞳に	杉浦恵美子 (21)	水戸紀行(1)	岡本八千代 (45)
白蓮華	堀川 勝子 (22)	「水魚」のことから(141)	今泉 由利 (46)
涙	平松 裕子 (23)	ことのはスケッチ(406)	平松 温子 (47)
忘れず	小野可南子 (24)	和菓子街道(72)	
日の出づる	山口千恵子 (25)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	
水戸紀行	夏目 勝弘 (26)		

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

もろむきにたわみなびけども篁の奥ふかくしてまひるまの闇

P
54

傾ける光に鳴き澄むひとつ蟬明日無き声とわれはききをり

P
56

歌集 「一本の木」

杉浦 弘

トルファンの小さく堅き干葡萄食みつつ火焰山のさま聞く

風の盆踊る乙女の伸ばす手のたとへば月に尾花光れる

色深くもみづる谷に入り来つつはがゆきまでに木の名を知らず

後ろ姿

蒲郡 岡本八千代

われにある二人の娘二人とも祖母となりたり今年の夏は

娘らと言ひあひし後のこの静けさ夜空の星より風は吹きくる

なんとなく今年は寂しあね姉妹の帰りゆくその後ろ姿に

姉いもと何話しつつゆくのやらふりかへらずに道を曲れり

後ろ姿見えずなりたりまだ立ちてここにゐるかな今年の母われ

本と本のあひまに寝ころび天井をみつめてゐるなりこの一時ひとときよ

夫の絵のけふ搬入日二人して八十号二作を車くるまに括くくる

形象派六十年の六十回め「博多の風」と「知多の便り」の絵

一夏もかくしてここに過ぎにつつ夫は夫にもわれはわれとて

一夏のすぎてゆくかな曾孫に「へのへのもへじ」を描きたることも

葡萄畑

東京 今泉 由利

書く描く画く三つのかくの範囲にてこの夏の日の過ぎゆかむとす

八月の二度目の満月のぼりくる日暮れのはやくなりたる空に

燠金の満月目指し往き往きぬせな背に満月ありつつ帰る

忘れ得ぬトウクマンの月レマン湖の月飛行機の窓埋め尽くす月

カーテンを開けて待ちます満月の私の窓に來たれる刻を

続きゆくりズムは身体に定着し葡萄を詠まむ十月のうた

勝沼の山のなだりに無限ともデラウエアの一房を描き

くくもれる今日の日射しを反射する葡萄球形葡萄色彩

ひと粒をひと粒をまたひと粒をデラウエアと一緒にゐたり

種無しに処理施さるる葡萄畑眺めてゐたり日の落つるまで

鉦たたき

豊川 弓 谷 久 子

ひめやかに我の一人の黙禱ぞあの空襲に逝きし友等よ

東洋一を誇りし海軍工廠の瓦礫と化せし日今も忘れず

宝塚志望の麗人すみちゃんも跡かた無かりき空襲のあと

倒れゐる屍幾体瓦礫の中を逃げまどいたり我十八歳

玉音の意味も分らず騒ぎゐて叱られたりき真夏日なりき

こもりゐる我にと子よりの一冊はおくのほそ道「芭蕉の杖跡」

庫裡玄関の一期一会の掛軸の今も目にあり静誠様逝きぬ

週一度の輪読会を楽しみて待ちいて呉れたり静誠様は

鉦たたき庭に啼きをり亡き人を偲ぶ今夜の我にふさわし

故も無く泪こぼるとスエ先生の一首を想ふ秋づく夕べ

自分の力で

新城 青木玉枝

夜々すだく虫の音色ねいろに秋を知る猛暑はいまだ去らぬと言ふに

ひつそりと夕闇せまる山里は灯あかりがポツンあちらこちらに

独居ははばからず終日をオリンピックのテレビに終る

高原の涼しさこれが夏かしら朝夕毛布をかけて寝るとは

グーチヨキパー首振り足あげ四十分わが体操は五年余続く

足萎へて手押車と杖の日び自分の力で出来得る限り

わが庭の樹々青あおと枝を張り隣りの空地へゆれつつ伸びる

今更と思ふ心に背をむけて夢でもいいよ故里恋し

ビルの群のなき山里の素晴しき日本家屋に老人ばかり

愚痴ぐちばかり言うわが心うとましく稻田の続く土手にて反省

もぢずりの花

岡崎 林 伊 佐 子

山風にあらくさ道の草騒ぐもぢずり低くひともと咲ける

もぢずりの螺旋をめぐりのほり咲くうすくれなるの数ふやしつ

もぢずりの花を残してわが夫は手間のかかはる野路のとら刈り

向日葵の花陰置かげく下に照り萎えし茎細く咲く百日草の花

一茎に一花の向日葵隅に作意のままの巨いなる花

雑草に追われる日々に遠き日の母の面影姑のおもかげ

朝五時に血圧計りて一日が予定通りに始まりて行く

日盛りはトマトの影に身を寄せるしとどなる汗目にしむものを

トマトの実おやつに食べて西瓜畑の跡始末する炎天の空

わが里の小さき村も人住まず棚田はいづこも山に還りて

玉虫

豊川 内藤 志げ

藪よりの涼しき風の窓に寄り椋の葉に舞ふ玉虫発見

斜め陽に次ぎ次ぎ光る玉虫ぞ幾百匹かと一人眺むる

椋の葉に止りし玉虫その上に次なる玉虫飛びきて止る

椋の葉に群れて飛びある玉虫にたまゆら光る黄金こがねの色に

玉虫の飛び去り行きしは何処にか涼しき風の作業場の窓

軒下の糸瓜の蔓は棚を尽し物干竿に今朝は届きぬ

盆前にと葱の畝間のスベリヒユ忽ちにして馬穴一杯

畦に立ち見返す田圃に目残しの稗ひともとの一本さ緑揺るる

夜半の雨慈雨と喜び今日の雨邪魔な雨だと人は云ふなり

予報には夜中に雨と聞きてより明日採る葱にビニール掛けむ

滾つ瀬

東京 佐藤喜仙

奥多摩の滾つ瀬岩に堰かれつつなほ清き水流れ行きけり

まそかがみ清けく流るる奥多摩の溪流下るさ赤きカヌー

溪流の疾き流れなるその下の緑の淵に舫ふ釣舟

鮎釣師釣れぬ日もありひもすがら案山子のごとく水に動かず

あしひきの山の奥なる清流の水は銘水百選なれる

川下りボートを追へる蝉時雨瀬音に和して流れゆくなり

河岸にカヌーを挙げて昼餉とるカヌーイスト等の色の鮮やか

夏葎はびこる力旺盛に特に背高泡立草の

ひさかたの雲の峰高しその下を赤きバイクの配達夫行く

御苑の中華造りの涼亭に偲ばるる詩仙そは杜甫李白

御礼肥

豊川 安藤 和代

孫達の巢立ち行く日を思ひつつ元気に朝のエプロン結ぶ

早朝の菜園渡る風涼し坊ちゃん南瓜の葉陰に見ゆる

畑の主と言ふ顔をして青蛙里芋の葉に動かずにをり

照りつける太陽の下長葱を植うる畝掘る汗ながしつつ

来年も咲くを願ひてカサブランカさらさらやさしく御礼肥をまく

綿菓子にもかき氷にも見ゆ夏の雲おなががすいたねお昼も近い

一齡には一齡に合う音のして御先祖の前木魚の音

反抗期無口なる孫は久びさに犬とじゃれ合ふ日曜の朝

暑さゆゑ何も出来ずに日の過ぎて日記の余白まぶしく見つむ

十葉の臭ひ残る手気にしつつ叔母の新盆の席に座りて

積乱雲

豊橋 胃 甲 節 子

枝を切る吾が愛しき木々悲鳴にも似てチエンソーの高き音聞こゆる

切られゆく桜椿や木犀の枝々の嘆きを静かに聴いてる

弓張りの山脈越えて真白な積乱雲むくむく次々うまる

晴れ渡る梅雨の晴間に湧き上る積乱雲は白々真白

美名子さん花柄も良きバスタオルお揃ひのタオルも添へて下さる

新刊書三冊お借りせし嬉しさに微熱忘れて読み進みゆく

三冊の本読み終へて爽やかな風新刊とゆふ風吹き抜けてゆく

低体温故つひエアコンを使はずにはやばやと吾は熱中症患ふ

大輪のピンクの椿の切口より芽吹き来し芽はみどり爽やか

朝の窓北側の窓より微けくも吹き入る風に秋が匂へり

夏アラカルト

大阪 伊藤 忠男

体温の調節効かぬイグアナに我もなりたか猛暑続きで

澄みわたる空の青さが恨めしや今朝も日差しの強さ際立つ

蝉の声激しさ増すか日を追いて緑の葉音かき消されゆく

ロンドンの熱気伝わる熱帯夜寝付かれぬまま朝を迎える

寝不足は夜の暑さか熱戦か眠りに付けず今日も明け方

体力の限界挑む闘いも果ては氣力が勝ち決めるなり

満面の笑顔に涙溜めた顔何故に晴れやか何故にさわやか

残暑なほ厳しさ残る夜明け前耳にコオロギ秋告げる音が

この夏の雨は多くて少なきや時と所でかくも違えり

残暑とは言えぬ猛暑に見えぬ秋待つ身の辛さ今年も愚痴に

写経

島根 金津 文枝

この年の四月五月は雨続き姉の墓地には草茂るなり

墓掃除すみし花立風に揺れカラカラ音を立てる午後には

洞光寺写経初まる静けさに蝉時雨のみしきりに聞こゆ

写経終へくつろぐひととき鬼やんまおほき一匹本堂巡り

刻印を押せば絵手紙引き締まる女が紅を塗れば同じと

我一人分析室に広島原爆の音を聞いた六十七年前

送り火を焚く長男と見上れば星は瞬き夜空明らむ

三百五十八本銅剣荒神谷発見跡を長男三男と巡りゆく

宍道湖に白鳥五六羽帰鳥せず益明に雄々浮かぶ

第四百四十七回芥川賞受賞作品冥土めぐり鹿島田真希一気に読む

世界平和

豊橋 伊与田広子

親友は着て行く服を心配せしわれの服でも良ければ贈らむ

飛鳥にて名古屋港より横浜に横浜東京鎌倉見物

東京にて浅草寺には行く予定スカイツリーは見て通るなり

浅草寺とスカイツリーに登る組と分けるが良きとわれは思ひぬ

新たなる津波の被害想定に心配となる被害なきかと

家建つる時盛り土せしは路上より三十センチ位と思ふなり

又一度防災課にて聞きて来む逃ぐるが勝ちともわれは思ひぬ

我が家も地震に強きと建てし家三十年過ぎ強度どうかと

戦争にならねば良いがとテレビ見る尖閣諸島や竹島問題

世界平和の実現にわれ思ふ国際司法裁判所強化を

御陵

新城 半田うめ子

保元の乱に敗れし崇徳上皇四国に流され憤死したりきとぞ

生きながら天狗の姿四国にて憤死したりき上皇偲びつつ

坂出の青梅町にて上皇の御陵りょうを拝みて目頭のぬれたり

上皇の祀まつられをりぬ白峯神宮の碑の前に坐しわれは額かぶずく

白峯神宮の御屠蘇を貰ひたり上皇を偲びつつ吾は有がたく頂く

怠りて掃除もせず孫の来て働はたらきし美しく片づけたりぬ

窓よりの眺めゐるなり野ぼたんの紫の花数多咲きつつ

老い呆けて右も左も違ひつつ迷ひき吾を友の親切あり

日の暮れて帰り来たれば夕食は出来てゐるなり孫の心使ひなり

八王子神社

春日井 清澤 範子

八王子神社に詣で柏手を打てば御幣かすかに揺るる

菜園に夏野菜の苗植ゑたるも猫はいたづらに畝を引きかく

立秋の今日猛暑なり八王子神社の境内蝉しぐれの中

神社に詣で心静めて帰り来ぬ日々草の花に水やる

吾が背丈越えて東西南北に花を着けたり百日紅は

吾と同じ薬をのみて勤めゐる娘愛しく愛しく思ふも

婿もなき娘と暮せば折々にそれも良きかなと一人思へり

今日もまた猛暑になるよ頑張れよビタミンドリンク夫より貰ふ

バスに乗る時も自転車に乗る時も吾が心には神様のあり

処暑の日は猛暑なりけり蝉の声高くも夜には蟋蟀の声

葉月

名古屋 近藤映子

冷房のタイマーの切れ目覚めたり又タイマーの冷房付けぬ

わが夫の経管栄養終る迄手足擦りて帰り来たれり

わが夫の冷たき手足擦り居て顔見ればジツト吾を見る

わが夫の「お母さん!」「映子さん」の声今はもう無く寂し

オイオイと夫のわれ呼ぶ声に目覚めればまだ明けきらぬ早朝のこと

夫倒れ日赤病院に救急入院以来早や八年目の夏暑し

毎年の八月朝は蝉の音に起されて居たのに今年は静かな夏

八階の鉢植に訪問す蝶のあと卵を置いて舞ひ去る

八階の軒先おおう暗雲の大つぶ雨の音立てて降り来る

稲光東に南にその光雷鳴共に激しき雨つぶ音立て降る

青き瞳の

蒲郡 杉浦恵美子

何食ふも構はないけど食はぬといふ選択もあり独りの暮し
独り身の気軽さ誰にも諮らずにブリスベンへと雲の上往く
独り身は気軽と云へど五時間も乗換待つ間の果てしのなさよ
我が夫が今はの際まで着けて居し硝子に疵あるこの腕時計
丸一日日本語話さず過したり通関過ぎてよしと眩く
年嵩も未だ四歳の三人の青き瞳に逢ひに来たのだ
はにかみて居し子じゃんけん教ふれば忽ち我の膝辺に寄りぬ
チャーリーは繊細な子よ父ダンに最も似てゐる母ローズ言ふ
子供らの無心な食ひ様これこそがいのちの塊生きるといふこと
片時も止まってるない寝息さへのち漲る幼子たちよ

白蓮華

豊川 堀川 勝子

仏殿の閣上たかどのの見ゆ鳳凰の今しも飛び立つ姿の凜凜し

築山は石また石の急斜面義政公の隠栖の園

千年の生命を秘めし白蓮華平等院にて今し相ひたり

千年の生命を継ぎ来し蓮の種その根は淀める水底の泥

ひたすらに千年待ちて咲きし蓮立ち去りがたく池の端に居り

千年の生命を咲かせし蓮の花我の生命も同じ生命の

孟蘭盆会済ませてその日に逝きましし静誠尼老師のみ姿清し

本堂の阿弥陀如来の前に座し護られいつつ学びし短歌

ジンジャーの黄の花群れを風渡る今日葬送の墓原の辺に

山門より眺むる浄願寺の大屋根の薨を白き雲流れ行く

涙

豊川 平松 裕子

何故の涙なるかと我に問ふひとりの車にひとり涙す

近く遠く更に遠くと鳴き交はす蝸の声寝ねて聞きをり

伏す部屋の西の窓には黒き雲南の窓には青空広ぐる

空の果てに溜れる如き朝の色ワイン色よりオレンジ色へと

セルロイドの風車の羽根は破れ果て秋立つ庭に回ることなし

静誠様の丹精こめたる浄願寺の庭の夏椿今年はいかに

蝸の声は日毎に減り来たり午前五時の寢床に聞きをり

鳴き交はすも稀となりたり我が峡の夏の終はりの蝸の声

父母はちちはははるまさぬことをかひもなく時折思ひ時折涙す

午後二時の夏空かき消す黒雲に早や蝸の鳴き始めたり

忘れず

豊川 小野可南子

差す日傘震はすほどの蝉の声菩提寺山門くぐり入りゆく

とろろあほひ
黄蜀葵の淡き黄の色やはらかきその花色に朝の風吹く

畝の間にひとつ小さき穴のあり潜めるは何大きな眼まなこ

土を這ひ草引く我と目が合ひぬ小さき穴に潜む蛙と

吹く風のあると思はず撤く水はミストとなりて私を濡らす

「今日は処暑だぞよ！」軽やかに歩み行かれし師の君忘れず

語彙少なき私に常々師の君は「そんなことも知らんのか！」

ひむがしの低きに真赤き朝の陽よ今日こそ雨は降ると確信

明日となる時はもうじき我が屋根を響もすばかり雨降り始む

庭土の匂ひ届きぬいきなりのどしや降り雨に叩かるる土

田の五つね

豊川 山口千恵子

日の出づる方にすべて向ひつつ向日葵咲けり畑一枚に

黒くなり東を向きて稔りゆく畑一面のひまわりの花

紫の小花連なり咲きはじむ盆の花なるみそはぎの花

生^なり下がる五つ六つのみどり色一つをとりぬ曲れるゴーヤ

零れ種に今年も咲ける百日草畑隅埋めて赤花ばかり

しおれたる里芋の畝に水をかける明日の朝は勢ひつかむ

色淡き茄子なり大きな天狗ナス切りとりゆけばトゲに刺さるる

十時半鎮魂のサイレン鳴りわたる体操に集ふわれら黙祷す

爆撃に死せる兄なり六十七年の年経て暑き八月七日

電線を伝ひてあるく猿二匹山遠き里の早朝のこと

水戸紀行

豊川 夏 目勝弘

冷房の電車によりて水戸紀行膝栗毛せし子規をめぐらせ

空腹を焼芋一銭また二銭求め満たして水戸に向ひしや

子規歩みし街道車窓の真下なりてその出立ちの姿を浮べ

整然と緑の田面ひろごれり縄手道なす面影のなし

土浦に近づき蓮田の目立ちきぬ茎高高と白き花ばな

蓮田また緑ひろぐる田園に暑さに霞む霞ヶ浦は

霞ヶ浦見たく街道はなれ行き感激をせし子規二十三歳

旅行社のキップ発行の誤りにて子規到着せし常磐神社見れず

水戸よりは那珂川舟にて下り行き子規は大洗にて太平洋に

子規の見しアメリカよりの打ち寄する砕ける波を今見てをりぬ

都電

招待 秋山逸穂

初めての蟬の鳴き声響きいる公園に来て日陰にうもる
木陰には汗拭く人が並びおり氷かく音に吸い寄せられて
夏陽射しのなかにゆらめく路面見え軌道遠くに黄色い都電
畑中に一列に並ぶひまわりの大輪どれも濃き陰つくる
田園に小島のごとき森があり近づくわれに蝉時雨ふる

梅田浜

豊川 白井信昭

午前五時梅田浜のひと巡り行き交ふ人なし護岸堤防
日の出前家を出でたり梅田浜の沖合染むる朝焼けみたく
やふやくに芥かたづき今日よりは干潟歩めり行きも帰りも
空青くみどり濃く映ゆ鳳来寺山自然科学博物館はもう近からむ
梅田浜の砂防堤巡る渚にて泳ぎしこともはるかとなりぬ

オリンピック

横浜 阿部 淑子

身心を極限までに鍛えぬき夢叶えてぞ金に輝く

サポーターと心ひとつに選手燃えメダルの力旗めく国旗

歳月を苛酷なまでに精進せしこの一瞬の成果をみつむ

ある時は悔し涙にほほぬらし心機一転また夢を追う

入れ歯噛みテレビにのめる老夫婦夜明けも知らで共に戦う

元禄

東京 富岡 和子

屋敷神守りし母の七回忌草木のしげり元禄の文字

屋敷裏山百合の咲く古き墓家族の集う憩いのところ

せみしぐれ友の便りはヤマト便好物ばかりに食のすすみて

木戸開けるやもりすばやく姿けし花魁草に雨の受け水

風呂そうじ光るタイルはひんやりと暑さをしのぐ一石二鳥

『いしよとせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

今ごろは糸瓜のみどりぶらさがり揺れてをらむや子規庵の棚

三田美奈子

貝殻をすり寄する音潮騒のやうな微かな幼子の寢息

稲吉友江

再びの小樽の駅に降り立ちぬランプの光かつてのままよ

鈴木美耶子

おほらかなる緑の境内を夫と歩むスピリチュアル^な生る出雲の大社

吉見幸子

群ごとにかたまりつつも光りつつ川の螢の勢ひ移る

牧原正枝

今朝やうやく咲きたる桔梗ほそぼそと光のなかに花のむらさき

岩瀬信子

電柱の根元に小さきクロッカス健気におもふ花の黄色に

石田文子

土用干しに梅の香強く匂ひつつ赤みは今日の陽に輝けり

山崎俊子

葉のかげにかくれ見えざりし西瓜幾つ今日はあらはに丸きころがり

牧原規恵

私の一首

雨ふくむ畝間の土に長靴を沈ませ行き来玉蜀黍の畑

内藤 志 げ

二月の下旬には雨が多く塊つちくれの解けぬままに玉蜀黍を蒔く。翌日は又雨。霜除けのトンネル作りビニールを張るまでには幾度も行き来する。種の上にマルチが掛けてある丈畝間に水が溜まり、歩く度に長靴は沈む様になり、手を使いながら作業。自分には結句の玉蜀黍の畑がこの歌の欠点かと思えます。玉蜀黍を蒔くとした方が歌としては整うかと思えますが現実とは違うことにもなりますが？

二階より見渡す村の廃屋に桜しろじろ咲き継ぎてをり

林 伊 佐 子

ふる里の二階から見渡すと満開の桜の木と廃屋が残っています。町に出る時主人が畑に植えてそれから風雪に耐え四十年になります。帰省する度、私達の代で世相も変わってしまった村桜の木は、悠然と立っています。毎週一度は里帰り、古池に待っている鯉に餌をやり、山道、野道の草刈りもあり、町と田舎の生活は忙しいし、楽しみもあります。友達との再会、田舎の情報を聞くのも活気があって、嬉しいものです。

天満宮に梅見る老いに声高め左千夫の墓はと繰り返し聞く

夏目勝弘

亀戸の普門院に左千夫の墓を訪ねたときに通りがかつた天満宮の街並に、観光客と少し様子の違う老人がいた。

たぶん地元の人であろうと、左千夫の墓のある普門院を聞こうと声を掛けるも、振り返えることなく、杖をついて歩いて行く。前に回り近づき、左千夫の墓のある寺はと聞くとただ顔を見ているのみ、再び聞く、ようやく耳が遠いのに気づき、声を高めて聞いてみた。

うなづきながら声には出さず方向を指差した。

音羽川浅瀬に集まるアヒル五羽こもごも首のべ川底あさる

山口千恵子

さわやかな風の吹く五月のある日「学校の日」ということで中学校に出掛けた。

まだ時間が早かったので、学校の傍を流れる音羽川の岸辺で川面を眺めていると、家鴨がつぎつぎとやってきて川底をあさる。その姿が可愛らしく心が癒された。

さらさらと流れる川面に枝をさしのべている桜の葉の緑色、そこで目についた家鴨の仕草がとても可愛らしく一首となった。

「俳句」

突然に会話とぎれし夜のメロン

植村公女

旧道のゆるく曲れり白木槿

牛の眼に問われてをりぬ秋暑し

一夏を洗い流して湯に浸る

一石

新冷や火星はかくも近くあり

蝉しぐれ短かい時を共有す

百花かかぐ路地の垣根の牽牛花

喜仙

揺り籠に無心の眠り初端午

雨あがり半夏生の葉の光りけり

空蟬の割れ目の奥を覗きけり

皓一

空蟬もひとつ命でありしとき

何しても効果なくして暑さかな

贈呈誌 八月号・九月号

冬雷

天野 克彦

青森アララギ

叶 楯 夫

柊

山田 範子

農道の舗装の高さ目に立てり田畑あまねく地震なみに沈みき

麻痺まひのこる子の手より受けし母の日の花は保ちて今日より六月

秋楡

三宅 千代

群山

徳山 高明

悩みし日わが孤り家の窓に見し積乱雲もいつか消えたり

遣り水に臨みて傘の内に坐し一とき夢みゆの雅みやびに遊ぶ

愛媛アララギ

正木 智紗子

榎の木

山田 久二

公園の木陰のナツナ花咲きて小さき撥の実あまた着きたり

障子の陰に吾をみつめて立てる妻目覚めて幻影と知る朝の床に

鹿児島アララギ

平城 エミ

穂の原

大谷 登美子

水張田に影を映して束の間の梅雨の晴れ間を虹立ち上がる

いつまでも寒し寒しと言ひをれど牡丹の苔はしかと漲る

高知アララギ

中山 たか

鈴木 せつ

どくだみは庭隅に白く花咲かすことしの吾の飲みものとせん

青空に真綿の如く浮ぶ雲猛暑の中を小鳥とびかふ

滋賀アララギ (八月号)

榊原 春司

俳句誌 かさね

松本周二

ゴックンと幼言葉に飲み下す母の声聞ゆ向かいの部屋より

タンカーの一つのほかは梅雨の海

九月号

渡 辺 芙佐子

蜘蛛の巣を払ひてパントマイムめく

子規の庭に残るトヨカ柿の若葉して乾きしわれの心を癒す

子規の短歌革新とアララギの歌人 (3)

佐藤 喜仙

明治十三年（一八八〇）松山中学に入学。中学時代初期の子規は、数人の友人と「同親吟社」という漢詩会を作り、漢詩ばかりでなく山水画にも熱中した。又明治十四年十月の国会開設の大詔渙発により、板垣退助を党主とする自由党や、大隅重信を党主とする立憲改進黨が起り自由民権運動が勃興したが政府の弾圧も厳しく、種々の法令を設けて運動を妨害したため、自由党は十七年十月終に解党の余儀なくに至った。このような社会的背景の中で子規は当時の多くの若者同様政治への関心を深め、同時に漢詩からは遠ざかっていった。子規は「第二中学校談心会」をはじめ他にも二カ所の演説会に入会し演説に熱中した。「無花果草紙」に残されている当時の子規の演説草稿を見る限り、その口調も内容もかなり激しく又ラディカルなものである。やがてこのような活動をすす中で当然の帰結として、子規は上京し東京で学ぶことを渴望するようになった。「河は鯨の泳ぐ処に非ず、枳棘は鳳凰の棲む所に非ず、海南は英雄の留まる処に非ず。早く此地を

去つて東京に向うべし」といった主旨の演説をしている。

だが、家に父はすでになく、家の経済状況では子規を東京に行かせる余裕は全くなかった。そこで子規が頼ったのは母八重の弟ですでに東京に出ている加藤恒忠（拓川）であったが、手紙で上京したき旨書き送つても叔父の拓川は上京せよとは言つてこない。再度明治十六年二月付の手紙で、切々と自分の思いを書き送っている。その中で上京の目的を「今時日を空しく松山に費やして一年間に一寸の智識を得んよりは寧ろ一年の時日を東京に費して一尺の智識を取らん事私の希望する所に御座候」と訴えている。それにもかかわらず叔父拓川の反応ははかばかしいものではなかった。五月には松山中学を独断で退学するという非常手段に出ている。いざとなれば「夜ぬけ」をしてでも上京したいと友人に語っている。だが幸いにして「夜ぬけ」という非常手段はとらずにすんだ。明治十六年六月八日、上京を許すという拓川の手紙がとどき、来るからには早々に決行されたしとあった。子規は心の準備は十分整つており、当時は荷物とて多くはなかったたのであろう。翌々日の十日、船で三津浜港をたち十四日朝、ついに東京の地を踏んだのである。

ある自然科学者の手記 (5) 大橋望彦

「DNA鑑定雑感」⑤

最近では、少量の検体でもDNA鑑定が出来るので、ミトコンドリアのDNAが検体としてよく用いられている。しかし、ミトコンドリアのDNAに関しては、体細胞のDNAとは異なり、忠実性に疑問が残るために（リング状の一本鎖のDNA、複製DNA合成酵素がガンマー型で、体細胞で複製をしている、忠実性のすこぶる良いアルファ型合成酵素とは異なる。且つ修復酵素がミトコンドリアの中では知られていない）鑑定の信頼性にやや欠けるところがある。先日も裁判で冤罪判定があったが、DNAが異なる為だった。これはミトコンドリアのDNAで得られた判定だけに、それは本当だろうか？と、疑いたくなるのである。鑑定について、裁判官はその鑑定方法の確実性に厳しくあつて良いのではなからうか。

ここで一言断っておかねばならないことを述べておこう。DNA鑑別に関しては以上のような状況にあるが、一方DNA診断もしくは遺伝子診断に関して、とにかく混同しがちであるが、これは全く異なった概念であるのでそのことに触れて

おこう。

DNA診断とDNA治療とは同じカテゴリーに入るものと言える。即ち、ここで言うDNAの殆どが、DNAの特定の塩基配列順序を指しており、大抵は何らかの遺伝子としての役割を果たしている領域もしくはその部分を扱っている。前述のエクソンに関して考えると考えてもよい。制限酵素というある特定の塩基配列（多くは3〜4塩基対）を認識して、その部分を切断切り出してくれる酵素があり、これを利用して分析が行なわれる。この酵素でDNA検体を処理すると、常に一定な、色々な長さのDNA断片が得られる。しかし、この認識部位に塩基配列順序の異常があれば制限酵素の切断を免れ、長さの異なるDNA断片が出来る。この長短のDNA断片を比較することで、先ず異常が在るか否かが診断される。その細部を解析すると、より正確（精度の高い）な診断が可能な場合が多い。先の鎌状赤血球の遺伝子異常もこれでわかる。DNA治療では、その患者の疾病の状態より、遺伝子に何らかの変化が存在することが疑われた場合、そのDNAの修復を加速するか、その部分を切り取るようなことで治療が可能かどうかを検討する。

即ち、先のDNA鑑定はランダムの変化により、そのDNA上の差異を比較検討するのに対して、DNA診断では、D

NAの安定した部分の特別な変化、ある意味での突然変異箇所を特定し、その検出と共に、修復の可能性を検討することである。

以上の様な理屈をこねてみたが、ほかにチャンとした理論が既に知られているのかもしれない。その点勉強不足というほか無い。でも、まだまだ興味ある問題が埋没していることだけはハッキリしてきた。

話は変わるが、ここで考えてきたことは、如何に巧妙に個体差が創られ、しかも出来た個体の起源は、如何やら減数分裂に始まっているらしいことも判ってきたが、ここで出来たDNAは生涯変わらず、やはり両親から由来していることも間違いない。多少の性質などは環境因子、要因に左右されるにしても、両親のDNAは厳然と生きている。このことを教育の中にもっと教え込んでよいのではないか。

自分の存在の尊厳を意識し、DNAの普遍性と共にその複雑且つ、断固として自己を保つ保持力の強さを大事にしてこそ、人間性の主張が出来ることをしみみと想うものである。

雑感の最後に、一期一会の仲間として、極めて得難い同窓を得ことは、後にも先にもこれ以上増える仲間でもなく、各DNAの異なった者同志の意思疎通は、この上も無い貴重なことであることを再認識している。

以下メモ

※イントロンの部分を人工的に変化させ、その結合しているエクソンの遺伝情報にどのような変化を与えることが出来るか？

※精子の運動の活発なものと鈍いものとを分別し（多分ミトコンドリアのDNAも反映すると思うが）、それぞれのDNAの違いを調べる。

※辜丸中のDNAと他の体細胞DNAとの違いは無いのか？同じ個体の中でも多分異なったDNA鑑定が得られるであろう。

※死んだ精子でよいが、セル・ソーティングで、何らかの性質の違う精子を分別出来ないか？ 個々の精子を蛍光標識で区別できる精子体表の性質を検討する。

※受精卵のリコンビネーションを抑えることが出来ないか？

※生殖細胞の倍数分裂の際に生ずる相同染色体の対合、交叉の頻度等をも少し詳しく調べる。

※世に言う隔世遺伝というのは本当にあるのであろうか？もしあるとしたらならば、どのような理論を当てはめるのが妥当なのか疑問である。

◆お詫びと訂正

前号P36上段後ろから3行目 コンビネーションをリコンビネーションに訂正

絹の話 (23)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

昭和48年私が東京赤坂一木通りに2坪の店を開いて、小さな店舗を3回(同じ通り) 移転し、9年目にやっと新築ビルの1階に店をオープンすることが出来ました。その頃はオイルショックも過ぎ、バブル景気の始まりで、ビルが林立し始めていました。TBS(テレビ局)本社のすぐ近くで、撮影

のスタジオも敷地内に有り、芸能人の方々が朝から深夜迄ひっきりなしに行き交っていました。国会議事堂の裏とあって政治家も多く、夜ともなれば芸者衆が人力車で料亭の間を渡っていました。不思議と学者や国連等の仕事をされる有名な方々や各国要人等々。これらの皆様が洋服の仕立てを注文下さって、女優さんの舞台衣装、女性政治家の服、女性学者の海外公演のひとひねりした盛装など様々で、オーダールーム兼企画室も数軒先のビル3階に開きましたが、常連のお客様や、色々な打ち合わせが多く、2軒隣のビルの中2階の「コーヒー赤坂」と云う喫茶店に1日3〜4回おじゃまし

ていました。この店は近衛さんの店と言われ、自家の山から切り出したと云う厚さ10センチにもなる檜の一本でカウンターや椅子が作られ、アンティークガス灯(中は電球)、コーヒーカップは近衛文麿元首相が若い頃ヨーロッパで蒐集したと云う品々で、私はマイセンのカップが好きでした。

内装は濃いマホガニ色で、壁は繭紬(ケンチュウ、柞蚕―中国北東部で採れる薄茶色の野蚕)で非常にシックな雰囲気醸し出していました。店に入ると穏やかなクヌギの里山に分け入った気分になりました。この絹は温度と湿度が高まってくるとマイナスイオンをほんの少し出すので、森林浴的気持になるのです。当時は喫煙が普通でしたが、野蚕は吸収臭性に優れているのでタバコ臭はあまりしませんでした。

出勤前、湯上がりの浴衣姿の若い芸者衆が厚いカットのガラス窓にもう一組映っているのを眺めながら、名画の下で、私も至福の一時を過ごすのが常でした。そんな時、時々オーナーの近衛のおバーちゃんが運転手付きのベンツ車でやってきて、踏み台を整える迄、車を降りない景色も店の絵になっ

ていました。この店の隠れた気持ち良さは絹の壁でした。

神戸地震の後、日本最大手の壁紙会社から劇場の貴賓室の壁を絹で貼りたいと云う依頼があり、インドの野蚕、タサール蚕の紬で作る事になりましたが、日本では絹は可燃物質に指定されているので、不特定多数の人が出入りする所は防火加工が必要で、裏面に化学処理をしましたから、絹の機能性が失われる事を懸念しましたが、完成してみると、大変気持ちのよい部屋が出来たと報告を聞いて安堵しました。

絹の部屋に居ると、アトピーやハウスシック症になり難いと学会の報告も有りますので、絹を防火加工せずに利用出来る様にしたいものです。幼い頃、喉が痛くなると真綿を首に巻いてもらって風邪を予防したり、綿の布団綿を薄く絹真綿でくるんで雑菌の繁殖を防ぎ、血行促進に役立てていました。壁材に使う事は部屋全体を絹真綿でくるんでいる様なものですから、保温性や保湿度に優れ、カビや雑菌の繁殖を防いでくれるので、病にかかりにくい気持ちのよいルーム空間が出来るのです。ですから、病院の壁などに絹を貼ったり、絹の

ゲルを吹き付けたたりすれば院内感染の予防に役立たないでしょうか？絹は木綿や化繊に比べて難燃性は優れていて、燃えても有毒ガスは出ません。ヨーロッパでは難燃繊維として広く壁材にも使用されていますので、日本ではどうしてこんなに素晴らしい繊維を建築資材にしないのでしょうか？

私の友人が湯河原で明治の元勳井上馨の別邸に住んでいますので、時々遊びに出かけます。和風洋式応接間の壁に、なんと太い糸の繭紬が貼ってあるではありませんか！当時日本では柞蚕を気候の合った冬寒い長野県で量産しようとしていましたので、国産第1号かも知れませんが、その時代日本には広幅の織れる絹機は殆ど無いので、上海から輸入した物ではないかと思われれます。更にもう一つの部屋の壁は芭蕉布が貼られています。部屋の調度品に東支那海のトカラ列島の宝島産の夜光貝の螺鈿の置物なども有り、天下国家の政治ばかりでなく、きめ細かく広く世界から資材を集め英気を養ったのでしょう。この様な話を持って、大手建築会社に絹壁の家を作りましょうと交渉しましたが、ぬかに釘でした。

物理学者と詩歌の世界 (33)

一石

シエルドン・リー・グラシヨール

シエルドン・リー・グラシヨール (Sheld on・Lee・G l a s h o w、1932-) はロシア系ユダヤ人の移民の家族にニューヨーク市で生まれた米国の理論物理学者。

グラシヨールはニューヨークのブロンクス科学高校で学んだ。1954年にコーネル大学より学士号を取得し、1959年にハーバード大学のジュリアン・シュウインガーの下で博士号を取得した。その後、スタンフォード大学 (1961)、カリフォルニア大学バークレー校 (1962) を経て、ハーバード大学教授となった (1966)。また、客員教授として、ブルックヘブン国立研究所 (1964)、ニールス・ボーア研究所、CERN (欧州原子核研究機構、1968) を訪れている。2000年にハーバード大学名誉教授。現在、ボストン大学の数学と物理学の教授 (参考資料1)。

グラシヨールの専門は素粒子論、宇宙論などであり、この分野での主な学問的業績に次のようなものがある。

1) 1961年、グラシヨールは電弱相互作用に関する理論を提案し、これは後に (1967) パキスタン出身のアーブドウス・サラムとステイーヴン・ワインバーグ (注

2、参考資料2) とによって発展された。この研究により、この3人は1979年度のノーベル物理学賞を受賞した。そのときの受賞理由は、「電磁気力と弱い力を1つのゲージ理論で統一的に記述する理論への貢献、特に中性カレント存在の予想」による。彼らの理論によって予言されたウイークボソンは1983年、カルロ・ルビアらによるCERNでの実験でその存在が確かめられている。

2) 1970年にはジョン・イリオポロス、ルチャーノ・マイアーニらとの研究で、チャームクォークの存在を予言した (注3)。

3) 1974年、H・ジャージャイと共同で、基本の力3種を統一する「大統一理論」を提唱。この理論によると陽子は安定な存在ではなく崩壊しうる。この可能性はその後の全ての統一理論の基礎となっており、もし正しければ物質世界の根底が揺らぐことになる。この可能性を実験的に検証しようとして、小柴昌俊により神岡核子崩壊実験が開始され、16万年かなたの大マゼラン星雲における超新星爆発に起源をもつニュートリノの観測につながった (1987)。この功績により、小柴は2002年ノーベル物理学賞を受賞した。

一般読者向けに書いた著作に、『素粒子物理学に未来はあるか』(本間三郎訳、丸善)、『グラシヨール教授が語る科学が描く大きな絵小さな絵』(本間三郎訳、丸善)、『クォークは

チャーミング・ノーベル賞学者グラシヨール自伝」(藤井昭彦訳、紀伊國屋書店) などがある。

グラシヨウに関わる話題を紹介する。

- 1) 一般にもよく知られるようになったものにグラシヨウの描いた「ウロボロスの蛇」がある。ウロボロスとは古代神話に出てくる、自らの尻尾を飲み込んで蛇のこゝと。素粒子物理学の理論の発展を長年現場で見てきたグラシヨウは「素粒子物理学の研究を進める事によって宇宙の全体の構造がわかる」と考え、このウロボロスの頭部から尻尾まで、大宇宙、銀河、星、太陽系、地球、人DNA、分子・原子、原子核、素粒子、基本粒子と順に配置する絵を描いた。この絵は現代物理学が明らかにした発展の様子、特にマイクロ世界と大宇宙との深いつながりをよく表すものとして「グラシヨウの蛇」とも言われる。
- 2) 素粒子物理学の最前線で盛んに研究されている理論に超弦理論がある。これはものの最小単位を「弦(ひも)」とする理論で、重力を含む究極の統一理論と期待されている。グラシヨールは「この理論は実験的な証明ができないので、物理学の理論としては懐疑的である」とする批判的立場に立ち、ハーバード大学からこの分野の研究者を排除しようとした。

注1…1961年、ジュリアン・シユウインガー(参考資料

3) は自然界の4つの力のうち、「電磁気力」と「弱い力」が統一する電弱統一モデルを提唱したが、グラシヨールは中性カレントを導入することによりこのシユウインガーのモデルを拡張した。グラシヨールが提唱したSU(2) × U(1)はその後成功を収めた電弱理論の基礎をなすことになった。

注2…ワインバーグはブロンクス科学高校の同級生であった。

注3…3種類のクォークのみが考えられていた1964年に早々と第4番目のチャームクォークの存在をJ・ブジョルケンとの共同研究で提唱していた。さらに1970年、チャームクォークを導入すれば、複数の事象を統一的に説明できることを示した。チャームクォークの存在は、1974年にサミュエル・ティン率いる米国のブルックヘブン国立研究所のチームとバートン・リヒター率いるスタンフォード線形加速器センターのチームによって、それぞれ独自に確認された。ティンとリヒターは、この発見により1976年のノーベル物理学賞を受賞している。

参考資料

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』
- 2) 三河アララギ、ステイヴン・ワインバーグ、P40、第59巻、第6号(2012)
- 3) 三河アララギ、ジュリアン・シユウインガー、P40、第59巻、第9号(2012)

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

〔月虹〕 鮫島 満

六、結城哀草果 2

焼あとのまだととのほぬせまき家に師は忙しく苦勞し
てをり 昭和三年

現身の苦しきときに詣つると観音堂に吾を連れ来ぬ

全焼して三年余り後の童馬山房跡を訪ねたときの作である。茂吉の日記には、「午後二結城哀草果来ル。……ソレカラ浅草ノ観音サマニ参拝シタ」とある。

北海道にゆかむ旅路を二日ほどここの温泉に憩ひたま
ひぬ 昭和九年

蔵王嶺に歌碑を起すと永野口高湯口よりこそぞりて登る
高湯口より晴れし蔵王をあふぎつつ茂吉日和とわれら
よろこぶ

山小屋の夜のつれづれに茂吉先生が蚤を飼ひたる話な
どしつ

蔵王山の白雲の中に建ちたまふ歌碑をあふぎて涙あふ
れつ

現身の茂吉先生を山のみねに残し来しごと歌碑はかな

しも

一首目は茂吉が北海道に住む次兄守谷富太郎訪問を兼ねる旅行に行った昭和七年八月のことを思い出して詠んだものである。茂吉は日記に山形の上ノ山の山城屋に立ち寄ったことを記し、そこに「結城哀草果トアフ。……夜ハ宴会ヲナス」とも書いている。茂吉は北海道で医師として暮らす兄を「おのづから白くなりゆきし鬚そめて村医の業に倦むこともなし」と詠んでいる。二首目以下には「八月二十八日午前八時蔵王山頂に斎藤茂吉歌碑建立す」と詞書がある。蔵王山頂に建った歌碑の歌は、「陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ」である。この歌碑建立には茂吉は立ち合わず、宗吉（北杜夫）、斎藤茂太らと箱根大湧谷に遊んでいる。

天地の栄ゆる御代ともろともに師のみ齡をことほぎま
つる 昭和十一年

高山の頂なごみ日ににほふしづけき老に入りたまひける
還曆をむかへまつりしみ齡はわれより十一年多くいま
すも

若くして蚤飼ひまししおもひ出も逸話となりてたのし
からまし

火災みれば背筋燃ゆると嘆きたまふ禍火の難も越えて

来ましぬ

みちのくの蔵王山にたぐひつつ師のみいのちは天足ら
しませ

題は「斎藤茂吉先生還暦賀歌」である。通り一ぺんの祝い歌ではあるが、茂吉が若いころ蚤を飼っていたという話を詠んだところにはおもしろみがある。

髭白く翁さびして寝入りたまふ枕にならぶ眼鏡と時計

昭和二十年

アメリカ軍による空襲が烈しくなった昭和二十年四月に茂吉は疎開のために山形県上ノ山に滞在した。その五月二十五日には東京大空襲によって青山の自宅・脳病院が全焼、家族も上ノ山に来た。右の歌には、「斎藤茂吉先生に従ひて蔵王高湯温泉に登る」と詞書がある。疎開騒動、自宅の全焼、家庭内のことなど心労のために「髭白く翁さびし」た師の姿への驚きが根底にある。

師の君はおのづからなる姿して汽車に乗りたまふ移り
住むべく

昭和二十一年

白蚊帳の内と外とに對ひ合ひ君は内にゐて言葉かけた
まふ

一首目は、茂吉が単身で大石田に移り住むために金瓶を出発したことを詠んでいる。茂吉は日記に、「金井駅ニ哀草果、光太郎君来ル。臨時列車ガ折好ク来リ、十一時半ノニ乗り汽車中ニテ弁当ヲ食シ、午後一時半前ニ無事大石田ニ著」と書いてある。右の歌の「おのづからなる姿して」について作者は、「先生は洋服に草鞋を穿かれて、風呂敷を田舎の小学生のようにして大黒背負いにされたその姿は、辺幅を飾らぬなどというよりもむしろ天真爛漫、天衣無縫の姿とでもいいたものであった」（『聴禽書屋日記』）と回想している。

二首目は茂吉が肋膜炎に罹って療養している間のことを詠んでいる。作者は右の（『日常記』）の中で、「大患後は目に立つて体力が衰えられたので、外出することをつつしまれ、夏も聴禽書屋にこもって昼夜蚊帳を外すことさえなかった」と記している。二人は蚊帳を隔てて話をしていたのである。茂吉の日記も三月十一日に「左背胸部ノ疼ガトレナイ」と書いて以降六月十一日まで空白になっている。

六十六歳の年むかへてすこやけく在さむ君をことほ
ぎまつる

昭和二十一年

この日の哀草果の行動の記録がないが、同じ県内に住む弟子として大石田に駆けつけたものと思われる。

水戸紀行(1)

夏目勝弘

猛暑の今年、節電の今年、家中の窓を開け放ち、石地蔵の様に動かずに居ても、汗は止処なく湧き滴り流れる。

子規の水戸紀行を地図に辿って気付いたことは、水戸街道と常磐線がほとんど平行して続いている。

子規の水戸紀行は膝栗毛であるが、この猛暑のなかでは無理なこと、そこで常磐線の冷房の車内より一歩も出ず、水戸紀行を決行することとした。

少年時代より無類の旅行好きだった子規、「俗気少き」天然に接し、これを直写することにより詩眼を高めようと病身にむちうち多くの旅をした。

その結果生まれた初期が「水戸紀行」であり、旅行紀のなかの「はて知らずの紀」は十数年前に、七日を駆け歩いてきた。病身であり外を歩き回らなかつた子規にとつて膝栗毛とはキツイ決行であった。

旅立ちには紀元二千五百四十九年四月三日午前六時、本郷の常磐會寄宿舎を友と出発。

上野の桜の荅の下を通り千住へ、そこで水戸街道を巡査にたずねる。巡査は左の手でコツチへと指された所を曲る。

そこで車夫に車賃をかけあい松戸に、小金の路傍の小屋に食物を並べる所で、鮫の煮物と飯とを食ふ、なんとなく物足りなく焼芋二銭で腹を満たし藤代にて一宿。

四日朝起きれば小雨、牛久を過ぎ田中の道にかかる、雨強くなるなかを行き一軒の小屋で、ふかし芋一銭だけ買う、そして土浦にかかる宿屋らしき所にて昼食、ここに来ればぜひ

霞ヶ浦をと、しかし街道からは見えず、高台へと段を上り。

○霞みがうら春雨ふるや湖の上

稻吉を経て石岡の萬屋に宿を定める。萬屋は石岡の第一等の旅店なりと

五日朝障子を開け屋根の上に真白に霜がおりている。

宿で水戸の宿の案内状を懐に筑波山を左にながめながら

○二日路は筑波にそふて日ぞ長き

正午までには長岡にと、されど足疲れ人力車に乗り、一時すぎに上市常磐神社に。

萬屋の案内状の宿にて通された部屋がなんと三畳ほどの納戸、すったもんだの結果、宿を紹介すると、連れてこられた所が下宿屋、しかたなく最後の宿とした。

六日曇天宿を出て大洗に向う。予定していた舟で那珂川を下る。

途中舟頭に櫂をかり漕ぐも直線に進まず右の岸に、舟頭に位置を正してもらってもまたも岸に、しかたなく舟頭に櫂をかえし哲学者然と舟に座る。

大洗に着き飯にせんと、ふるびた二階に石を食うも、かくはあらじと腹を立て、一杯を食ひ逃げるように店を出る。

浜辺に車夫がたむろし、弱りきつた一人の足を見すかさず、最早かくなる上は車にのらぬと、三里ばかり歩み仙波湖(千波湖)に沿い上町の停車場の近くの宿に、明日一番の凧車に乗る積りにて、一夜の夢に日頃のくたびれもやすめんと、

翌七日朝大雨、朝食は間にあわず弁当をこしらえてもらい、一番凧車に乗り、正午近くに上野の停車場へ、余りの早さに、あるきて来しことがおかしく思う、そして旅費の残りだと西洋料理店に向う。

「氷魚」のことから (141) 岡本八千代

炎暑の中、赤い百日紅の花が今年も輝きゆれている。

ロンドンオリンピックも終わった。(12日) 次はブラジルのリオデジャネイロとか。私は今、まだ印象に残っているのは、体操選手内村航平の「オリンピックには魔物がいる」と言ったことばだ。——彼は絶対の心を以って望んだはずの鉄棒の予選演技に落下してしまった。また、あん馬での落下、ゆかの着地で手をつくというミス……。ほんとうに魔物がいたと思えない。

しかし、その失敗を乗り越えて、個人総合で見事「金」をとった。一体、どうして乗り切ることができたのだろうか。——。

また各種目の各選手たちの命がけの挑戦ぶりに涙がにじむほど興奮した私であった。選手たちの、勝って泣く涙、負けて泣く涙、どちらとも尊い美しい涙なのだ。——。いや、涙のない人も、それぞれの尊さがあるのだ。今こそ人間の心の不思議、その人その人の心の不思議を感じざるを得ない。

△「当世媛鏡」の続き。(子規の小説)

二十、二十一。(一年前の早春)

○その靴音は、一個の少年が、背戸口より入って来た音。

少年は「水を吞ませて下さい」と言った。お清は、顔を

見合せて再び驚いた。そして「貴君は」と。……。

○ここで、ある一室の描写となる。

右の方にピアノ、左の方に花籠、正面に大鏡がかけられている部屋。奥にも間のある如く見せてある西洋風の一室。中央の丸テーブルを隔てて向い合っている男女二人。

○客の男は小萩才吉。主の女は中谷たく子。

○二人の話——学校を卒業して肩書をもっていないとだめな世の中のこと。才吉の父親の遺言では「千辛萬苦尽して己の位置をつくれ」だったこと。

○それ故、「私は第一に位置を高めることに力を尽すつもり」「学校を卒業したら交際場裏へ飛び出すつもり」……。一方、たく子は沈黙してたゞ聞いていた。

二十一。(男三人の会話)

○たく子は部屋を出てゆき、才吉と、中谷、山室が加わった。○政治家になるならないの議論。それには、長官の娘を娶るとか、金満家の贅になるとかの話にもなる。

○今日の政治において「鹿鳴館の夜会に舞踏を知らぬ妻君、慈善会の招待に音楽を知らぬ妻君、洋人に逢って握手を知らぬ妻君、これらの妻君は、君その人の恥のみでなくその夫の恥となるのだから」。

○また「容貌の美でなければ、また、種々の知識と一個の見識とを持っていなくちゃならない」という話も出た。

(つづく)

ことのはスケッチ (406) 今泉 由利

『葡萄畑』

何時でも何処でも、「スケッチしたい」と思い続けている。実際に、絵を描くという状態にはなかなか整わない。

留まらない場所だったり、天候に左右されるし、物騒であること、危険をとまなうこと、時間が足らないこと、勇気がでないこと……いくらでも不都合は押し寄せる。

気弱なままになってしまっていたけれど、素晴らしい解決策をみつけた。『イラストレーター・画家・永沢まこと先生の引率するスケッチ講座』早速参加して虜になってしまった。

『街で人物をスケッチするコツ』。はじめての講座は、教室を電車内に設定し、シミュレーション・スケッチ。参加者がお互い、スケッチャーになった。電車や街で見知らぬ人を、サッとクロッキーしてしまう方法を学んだ。

ニューヨークや世界中をスケッチして巡られた先生の作品にびっくり。私がどうしても描けなかった場所の風景に、街をゆく人物が描かれている。

観察が深いほど線を引く決断も潔くなり、勇気をもって美しい線が引けることを教授下さった。一本の線で、姿も雰囲気もみな伝うような……そんな線をめざして来た身にありがたかった。

次の講座は、チャーターされたバス。十五人程引率される

のに混った。

四時間バスは走り、道中お弁当も用意されていて、伊豆稲取の動物園、アニマル・キングダムに着いた。ウオーキング、サファリ、動物達にとてもとても近付ける。何不自由のない所。先生はご自分の絵を描かれるのに集中しておられる。こもごも気に入りの動物と心ゆくまで付き合える。

キリンの親子。サイが二匹。ホワイト、タイガーがガラス越しの足元まできてくれる。ライオンもウトウトしている。本物の動物と身近になれ、帰りのバスの中で、皆の成果を見せ合い、先生のコメントをいただき、東京に戻った。

次。トンネルばかりの道をひた走り、景色にりんごの木、栗の木が多くなって小布施に着いた。

あまりに見たい、知りたい、描きたい……が多く、うろうろしてしまふ。小布施風建物。小道をゆくその足元。メタセイコの巨木。こよなく「北斎」の世界にひたり、栗のおこわのおいしかったこと。また行きたいことを残した。

次。勝沼の山のなだりにふうわりと、葡萄畑が続いている。その畑の中でスケッチをするのが目的。

葡萄畑はどこまでも続き、全部の葡萄の房が白い紙袋に治まってる。一房につき葉っぱが幾枚と管理されていること。デラウェア畑は、一粒の種もゆるさぬ種なしの構えをしつかり描いた。

アンデス山脈の麓の葡萄畑やヨーロッパの葡萄畑、もちろんワイン用の畑だったけれど日本と雰囲気がかんなに異なること。日本に居ることをつくづく思う。

次。

和菓子街道 (72)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

大津の中心地、現在の滋賀県庁にもほど近い所に、天孫神社というお宮がある。古くからの大津宿の氏神様で、毎年10月にはこの神社の例大祭として大津祭が斎行されている。意匠を凝らした絢爛豪華な曳き山13基が町を練る様は圧巻。どの曳き山も天孫神社の前まで来ると、からくり人形による出し物を披露する。氏神様にとっても、町の人々にとっても祭りは年に一度のお楽しみだ。

旧街道沿いの鶴里堂では、この大津祭の曳き山13基を題材にした菓子「祭菓子十三題」を祭の期間中のみ製している。西行桜狸山に神宮皇后山、源氏山、西王母山、猩々山、孔明祈水山など、それぞれの曳き山をイメージした13個の美しい生菓子だ。

宿場町の祭りの賑わいを楽しんだ後は、祭菓子十三題を土産に持



ち帰り、祭りの余韻に浸るのが、ここ数年の楽しみになっている。

それぞれの風情から、どの曳き山の菓子が当てるのも楽しい。

◆鶴里堂

住所：滋賀県大津市京町1丁目2-18

電話：077-523-2662

お知らせ

▽十一月号原稿は、十月一日(月)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考慮あわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

▽朝晩は涼しさも感じられるようになりましたが、今年の夏も連日、大変な暑さでした。ロンドンオリンピックも興奮と二抹の寂しさを残して終わりました。さまざまに競技にたち向う選手たちの、勇気や努力、その逞しさに世界中の人々が大声援を送りました。

▽強い日差しの中で、向日葵が畑一面咲き誇っている情景に出会いました。その凛とした姿に目をうばわれました。

今しばらくは、この暑さも続くと思われませんが、ご自愛いただき、涼しい季節を待ちましよう。

▽河原静誠様が亡くなられました。三河アラギ会の古くからの会員で、寺の住職をしておられ、会員を教え導いても下さいました。ありがとうございました。(山口)

三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年九月二十五日印刷 第五十九巻第十号
平成二十四年十月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

今泉由利

三河アラギ会

豊川市 御津町 御馬 西三七

T E L (〇五三三)七五二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

URL <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜 創 美